

## 資料1 「校内研修にかかわる調査」

本研究では、群馬県の小・中・特殊教育諸学校の校内研修の現状を把握するために「校内研修にかかわるアンケート」を実施した。調査及び結果の概要は以下の通りである。

### 1 調査の概要

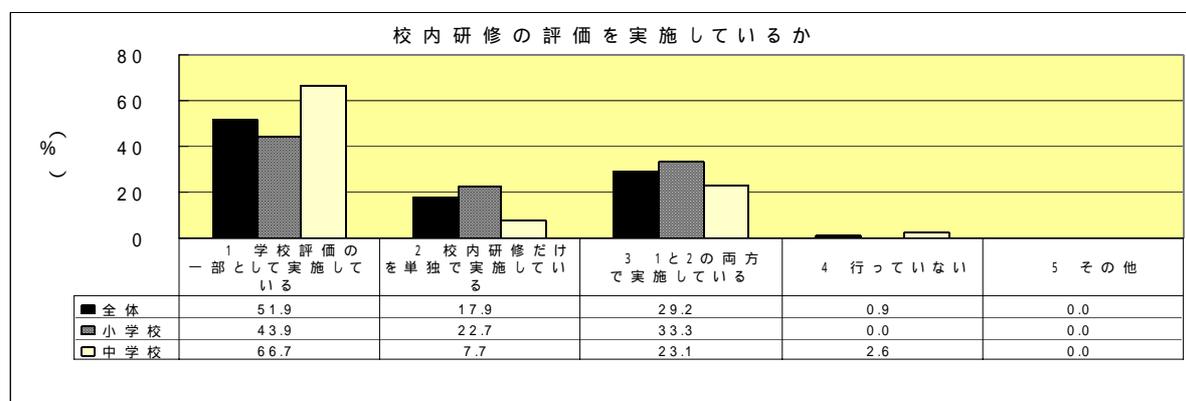
調査名及び実施時期	調査方法	調査対象	校種別内訳		
			小学校	中学校	計
校内研修にかかわるアンケート (平成14年7月)	質問紙法	教育センター特別研修員(小・中・特殊教育諸学校)の所属校の校内研修主任	67名	39名	106名

(注)小学校67名の中に特殊教育諸学校の1名を含む

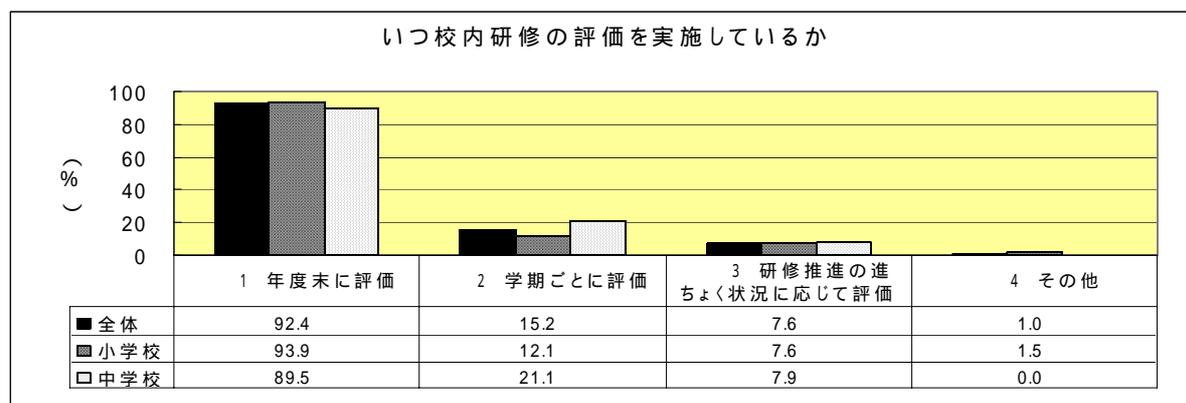
### 2 結果の概要と考察

#### (1) 校内研修の評価とその活用

グラフ1



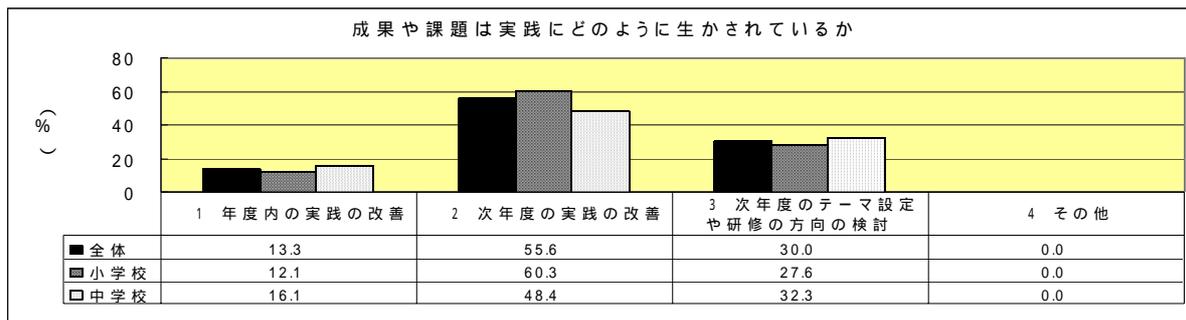
グラフ2(複数回答可)



グラフ1から、ほとんどの学校で校内研修の評価を実施していることがわかる。このうち学校評価の一部として校内研修の評価を行っている学校が全体の半数を占める。また、グラフ2から複数回答した学校を除くと、校内研修の評価は、年度末に1回だけ行われる学校が小学校で約8割、中学校で約7割となっている。学期ごとに評価を実施している学校は少なく、研修の進捗状況に応じて評価を実施している学校は、小中学校とも1割にも満たない。

校内研修の評価の活用に関するアンケート項目では、評価が教育実践に「生かされている」「どちらかという生かされている」が全体の85%、「ほとんど生かされていない」「どちらかという生かされていない」が15%という結果が出ている。

グラフ3

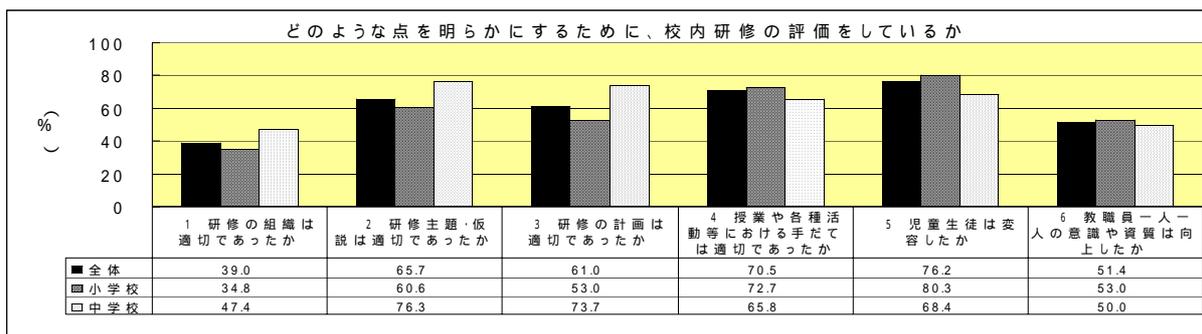


グラフ3は、前者の学校を対象に、成果や課題の生かされ方について調べたものであるが、小中学校とも、次年度の実践やテーマ設定に生かされることが多く、年度内の実践にフィードバックされて生かされていくケースは極めて少ない。

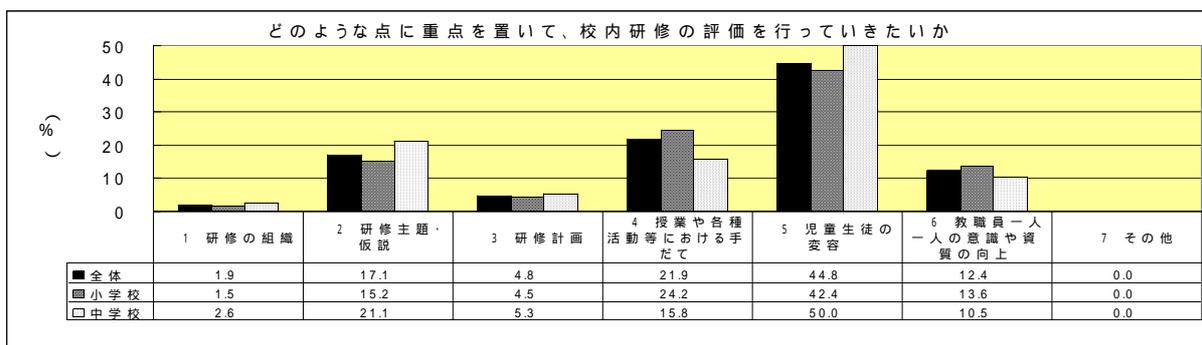
このように、アンケート結果を見ると、校内研修の評価は年度末に一度、しかも学校評価の一部として実施している学校が多く、そのため、研修の成果や課題が明らかになっても、なかなか年度内の教育実践に生かされていないことがわかる。この現状を改善していくためには、校内研修の進捗状況に合わせて研修の節々で校内研修を評価し、成果や課題をその都度教育実践にフィードバックしていけるような評価のあり方を探っていくことが大切であると考える。

(2) 校内研修の評価の重点と「目指す子ども像」

グラフ4(複数回答可)



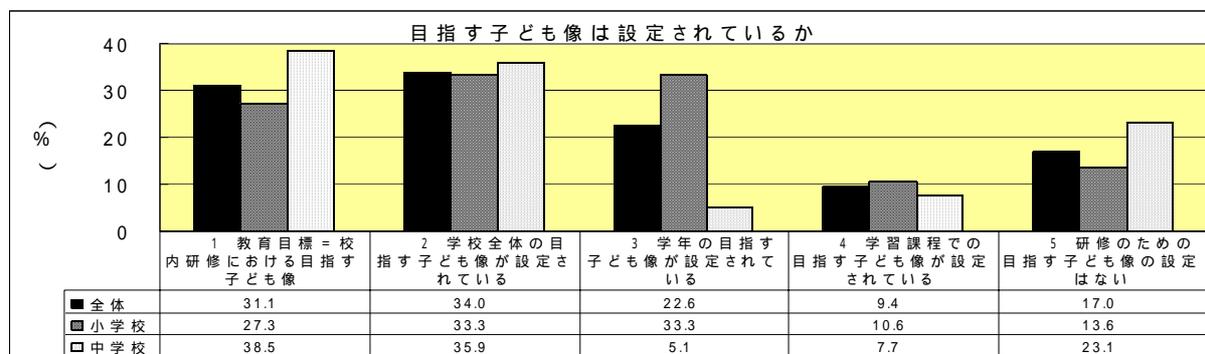
グラフ5



校内研修の評価の観点の現状についてまとめたものがグラフ4である。グラフ4からは、校内研修の評価の観点について小中学校でやや違いが見られ、小学校では、「児童の変容」「手だて」が、中学校では、「主題・仮説」「計画」が上位を占めている。グラフ5は、今後、校

内研修の評価に当たって重点を置きたい観点について表したものであるが、小中学校ともに「児童生徒の変容」に重点を置いて評価を行っていきたいとする学校が全体の半数近くを占めている。

グラフ6 (複数回答可)



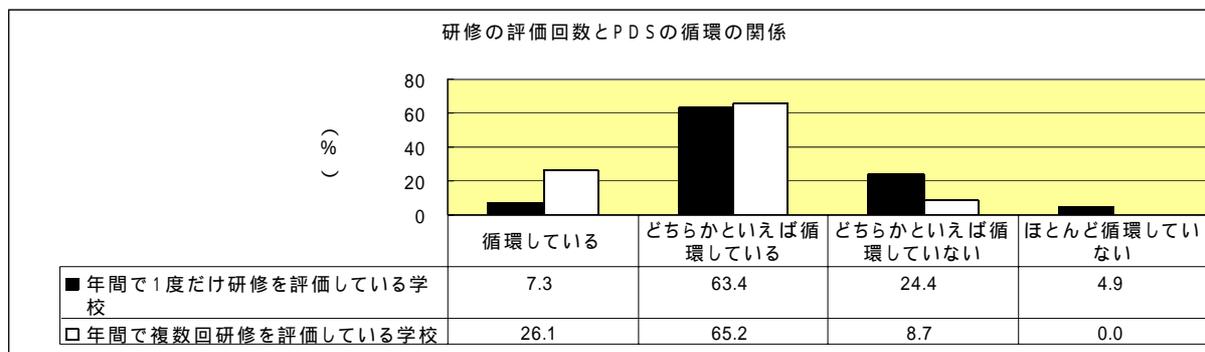
一方、「目指す子ども像」の設定について調べた結果がグラフ6である。研修のための「目指す子ども像」を設定していない学校が小学校で13.6%、中学校で23.1%ある。また、学習過程での「目指す子ども像」を設定している学校は全体でも10%不足となっている。

校内研修の評価の重点を「児童生徒の変容」に置く学校が多いにもかかわらず、子どもの変容をとらえるための基準ともなる「目指す子ども像」を設定している学校は意外にも少ない。

この結果から、子どもの変容に視点を当てて校内研修の評価を行うためには、各学校で、より具体的な「目指す子ども像」を設定するとともに、教師の手だてと子どもの変容から授業実践を振り返り、改善策を講じていく必要があると考える。

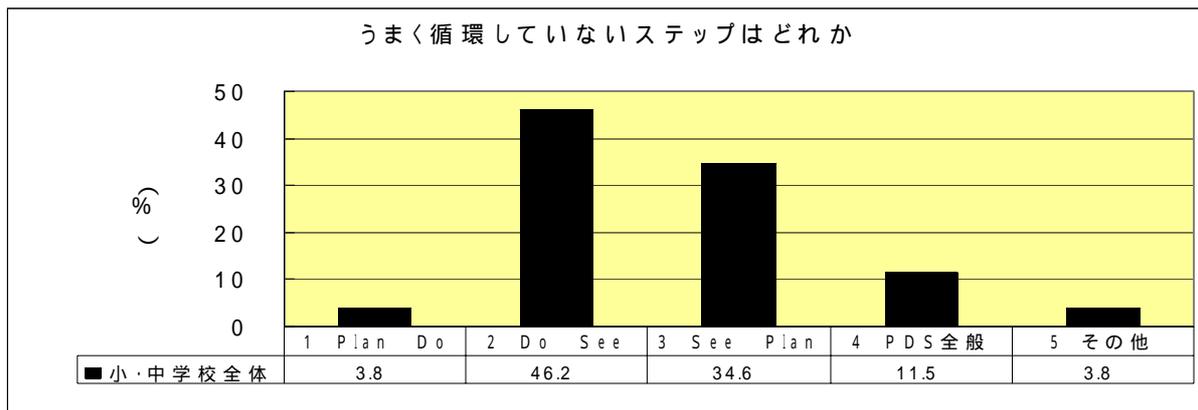
### (3) 校内研修のPDSサイクルの循環

グラフ7

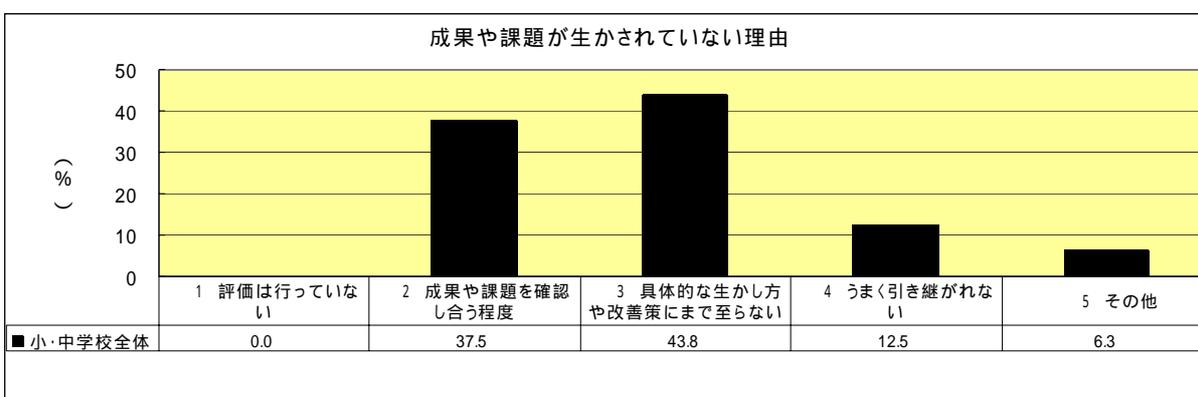


校内研修のPDSサイクルの循環について、研修の評価回数との関係から調べた結果がグラフ7である。「どちらかという」とを含めて「循環している」と答えた学校は、年間に1回だけ校内研修の評価を実施している学校で70%程度なのに対して、年間に複数回の校内研修の評価を実施している学校では、90%を超えている。反対に、「どちらかという」とを含めて「循環していない」と答えた学校は、年間に1回だけ評価を実施している学校では、3割近くを占めているのに対して、複数回評価を実施している学校では、1割にも満たないという結果が出た。このことから、年間に実施される校内研修の評価の回数がPDSの循環と大きく関係していることがわかる。

グラフ8



グラフ9



次に、「どちらかという」とを含め、校内研修のPDSサイクルが「循環していない」と答えた学校について調べたところ、うまく循環していないステップとしては、グラフ8にあるように、Do See と、See Plan が8割を占めていることがわかった。このことから「See」にかかわるステップがサイクルの循環を滞らせる原因になっていると考えられる。これに関連した資料がグラフ9である。このグラフは、校内研修の評価の活用に関するアンケート項目で、評価が実践に「ほとんど生かされていない」「どちらかという」と生かされていない」と答えた学校に、その理由について調べた結果であるが、校内研修の評価によって明らかになった成果や課題が教育実践にフィードバックして生かされていない理由として、「具体的な生かし方や改善策にまで至らない」「成果や課題を確認し合う程度」の二つが全体の8割と際だっている。このことから、校内研修の限られた時間の中で評価は実施するものの、研修の成果や課題を次のステップに生かすための具体的な手だてがないためにPDSのサイクルが循環していない現状が推察できる。従って、校内研修のPDSサイクルを循環させるためには、校内研修の評価方法の見直しとともに、研修の成果や課題を確実に次の教育実践につなげていくための手だてを工夫することが大切であると考えられる。